

近代アジアにおける西洋絵画の受容と変容

巧みな伏線により、読者は学術書に希少な興奮を味わうことになる

橋本順光

稲賀繁美 著

絵画の臨界

近代東アジア美術史の極端と命運
14・1・10刊 A5判786頁 本体9500円
名古屋大学出版会



記念碑的な大書である。主
題は一言でいえば、近代アジ
アにおける西洋絵画の受容と
変容だが、射程は恐ろしく広
い。論究される人物だけで約
千人。ただ、当初の端役が後
半で重要な役割を演じるなど
伏線が巧みで、読者は学術書
に希少な興奮を味わうこと
になるだろう。

芭蕉をもじっていえば、古
人の(絵)筆の跡と古人が求
めた跡の両方に、著者は緻密
この上ない筆致と構成で迫っ
てみせる。『絵画の黄昏』、『絵
画の東方』とすでに古典とな
った大著で、19世紀西欧絵画
のアカデミー制度が破綻する

舞台裏を活写し、その再編の
際に破線と補助線を引いた
「東方」の意外な役割を浮か
び上がらせた著者である。ほ
ころんだ近代絵画が「東方」
でどのように移植され、臨界
を迎えたのか。本書は、前二
作同様、絵巻物のように図版
を掲載しながら、植民地や戦
争そして戦禍に対して絵画が

切り結んだドラマを描き切
る。三部作は完結し、東西の
往還とともに円環は閉じられ
たといえようか。
むろん西欧絵画の制度が地
球を一周して終焉したとい
う単純な話ではない。むしろ、
著者がいう「全球化」の一
時代がこつて始まったこと
を、そして我々はまさにその
時代に生きていることを本書

プッシュである。著者は、これ
こそ大航海時代以来、東洋の
事物を自由に切り貼りしてき
た泰西美術を裏返しているの
ではと切り返す。そこから
「美術史の『海賊史観』と『絵
画の臨界』という序章とお
りに、壮大な見取り図が広が
ってゆく。

でも直輸入してしまう現状へ
のすぐれた批評的な、文字通
り海賊的な略奪ともなってい
る。この序章だけでも必読だ
ろう。

海賊の交換が、百年以上前か
ら連綿と続いてきたことを、
まさしくワールドワイドウェ
ブのように紡いでみせる。
たとえばニーヴェディータ
は、岡倉覚三に協力し、その
『東洋の理想』に序文を寄せ
たフィリピン出身の女性で
ある。本書は、初めてその意

義を指摘した画期的論文を取
りあげ、英国と英語を媒介しな
がら、インドと日本が接触し
交差するパノラマをさらに浮
かび上がらせる。神像が転
写、転生してゆく曼荼羅の如
き見取り図(207頁)は壮
麗だ。

抱いた読者の道標になるよう
手の内を明らかにし、行き届
いた約言とともに書誌が厳選
されている。失われた美術こ
ろろと残された名画や
洞窟など、そこには残された
魅力的な課題や着想の種がひ
っきりと挿み込まれている。

かように本書図版は本文の
添え物ではない。たとえば青
木繁の「大穴知命」にテオ
ドール・リボー「奥きサマリ
ア」の転用をきりげなく指
摘するなど(125頁)、そ
れ自体きわめて示唆に富む。
英語では同じ単語だが、鑑賞
するアイコンというより、そ
から連想と着想が導かれるア
イコンとして機能していると
もいえる。

いつつ撒種される「東の間の
建築」(94頁)ともなるだろ
う。あるいは蘇生したオオナ
ムチではなく、その遺骸から
殺物を産生させたオオケツヒ
メを連想してもいいかもしれ
ない。著者が時に切断し、時
に接続した無数の異面から、
新たな研究がこれから誕生す
るだろうからである。

三郎などの絵がその文脈を無
視して、野放図に暗記すべき
は急務だ。と同時に、海賊史
観という、英語圏に流通させ
る際にはほれおちがちな思
考と文脈、とりわけ著者によ
る各地での研究発表の報告と
記録はもっと読みたく思っ
た。ポストコロニアリズムの
抵抗が大英帝国内の覇権争い
に回収されてしまうことを、
もりてランシーの態度を研ぎ澄
ました読者に衝撃はひとし
おだ。絵画を歴史の押し絵と
して片づけない、本書のもう
一つの主題が痛感できる仕掛
けになっているのである。

主に関西で海賊品を意味す
る言葉をもじり、有名高級フ
ランドをまとったパッタのオ
ブジェである。著者は、これ
こそ大航海時代以来、東洋の
事物を自由に切り貼りしてき
た泰西美術を裏返しているの
ではと切り返す。そこから
「美術史の『海賊史観』と『絵
画の臨界』という序章とお
りに、壮大な見取り図が広が
ってゆく。

このように著者は、断罪も
免罪もせず死者たちの置かれ
た状況に寄り添い、その試行
錯誤を見つめ、大きな文脈に
開いていく。そこにはどこか
めぐる最終章は、世界美術史
をめぐるフィリピンランドでの学
問の行儀が連想された。そ
の点で本書は、絵画の臨界を
島出身の著者が世界の文脈へ
踏査し、限界まで(絵)筆を
開いた講義に基づく。いわば
とり続けた人々への鎮魂碑な
『絵画の臨界』の臨界もまた、
のかもしれない。大冊ゆえ物
量的にも巨大記念碑に見える
が、本書は崇敬されるだけで
なく、伊勢神宮のように解体
(大阪大学准教授)

詳細な注も必読だ。関心を
このように著者は、断罪も
免罪もせず死者たちの置かれ
た状況に寄り添い、その試行
錯誤を見つめ、大きな文脈に
開いていく。そこにはどこか
めぐる最終章は、世界美術史
をめぐるフィリピンランドでの学
問の行儀が連想された。そ
の点で本書は、絵画の臨界を
島出身の著者が世界の文脈へ
踏査し、限界まで(絵)筆を
開いた講義に基づく。いわば
とり続けた人々への鎮魂碑な
『絵画の臨界』の臨界もまた、
のかもしれない。大冊ゆえ物
量的にも巨大記念碑に見える
が、本書は崇敬されるだけで
なく、伊勢神宮のように解体

関心を
このように著者は、断罪も
免罪もせず死者たちの置かれ
た状況に寄り添い、その試行
錯誤を見つめ、大きな文脈に
開いていく。そこにはどこか
めぐる最終章は、世界美術史
をめぐるフィリピンランドでの学
問の行儀が連想された。そ
の点で本書は、絵画の臨界を
島出身の著者が世界の文脈へ
踏査し、限界まで(絵)筆を
開いた講義に基づく。いわば
とり続けた人々への鎮魂碑な
『絵画の臨界』の臨界もまた、
のかもしれない。大冊ゆえ物
量的にも巨大記念碑に見える
が、本書は崇敬されるだけで
なく、伊勢神宮のように解体

関心を
このように著者は、断罪も
免罪もせず死者たちの置かれ
た状況に寄り添い、その試行
錯誤を見つめ、大きな文脈に
開いていく。そこにはどこか
めぐる最終章は、世界美術史
をめぐるフィリピンランドでの学
問の行儀が連想された。そ
の点で本書は、絵画の臨界を
島出身の著者が世界の文脈へ
踏査し、限界まで(絵)筆を
開いた講義に基づく。いわば
とり続けた人々への鎮魂碑な
『絵画の臨界』の臨界もまた、
のかもしれない。大冊ゆえ物
量的にも巨大記念碑に見える
が、本書は崇敬されるだけで
なく、伊勢神宮のように解体